

《ロンドンからのたより(両親宛)》・1978&79
～【タヴィストック】いざ飛翔せんと～

■お詫び & お断り■

誠に遺憾ながら、ロンドンから私が両親宛に出した書簡類の内1978年の殆どが紛失しており、無いのです。憶測するに、書簡といっても、当時もはや長々とたよりを書き綴る余裕は持てなくなっていたから、おそらく私が彼地で折々に買い求めた絵葉書のウラに近況を簡単に書き記す程度になっていたかと思われる。それら絵葉書は珍しくも綺麗であったからアルバムに貼られ、あちこち回覧されたということもあり得る。帰国後父親から手渡された一つの大きな箱の中にロンドンから届いた私の封書・エアレター類が保管されてあった。30年余り経ていざ整理してみると、1978年の殆どすっぽりと無い。父親が他界した今、もはやその行方を辿るすべも無い。振り返れば1978年頃には、教育分析は週5回、相変わらずであったし、セント・ジョージ病院での担当ケースも増えており、【タヴィストック】で手掛け始めたトレーニング症例もDr. メルツァーからの個別指導を受け始めたことでいっそう弾みが付き、何かと急ピッチで多忙を極めていた。他に私生活面で記憶に残ることといえば、春の復活祭休暇を利用してのパリ行き、それからもう一つ、母親が夏、単身渡英してきたことである。母親は往復の旅程では団体ツアーに参加したが、ロンドン滞在中は専ら私と二人、8月6日以降一週間のごく短い間ではあったが、共に精力的に多くの時間を観光に費やした。ロンドン市内は勿論、トラファルガー・スクウェア、バッキンガム宮殿、ハイドパーク、そしてBritish Museum ・・。ロンドン郊外もあちこち日帰りバスツアーを利用し出掛けた。【タヴィストック・クリニック】を案内したのは勿論のことだが・・。

それらの詳細について記録されたものは何ら手許に無いわけで、私の記憶も臆であり、今や回顧することは無理である。それでその埋め合わせになるか否かは分からぬが、母親・山上つる枝が纏めた「自分史」の中から文章を抜粋してここに掲載し、当時を思い出すよすがとしたい。

【花菖蒲】 山上つる枝 著

〔平成7年7月出版〕

・・・ヒースロー空港に遅れて着いた飛行機の人々を迎える白人や黒人の人混みの中で、「おかあさん」と呼ぶ千鶴子の声のみ聞こえ、そのうち姿も見えてほっとし、やれやれ、これで英語を喋れなくてももう大丈夫と、バスで皆とホテルに向かった。ホテルの部屋番号を確認した後、団体と別れ、千鶴子と二人で行動をとった。

下宿はタヴィストックの近くで、閑静な住宅だった。飛行気乗りのご主人だそうで、留守を守る奥さんは別棟に住んでおられ、二階の千鶴子の部屋まで絨毯を踏んで上がった。広い一室にベットや暖炉があり、トイレとバスは共同で、隣にオーストラリアの学生が住んでいた。なかなかきれいに整理された部屋の絨毯も美しかった。靴を脱ぎ、スリッパにはきかえ、やっとほっとした。

それから毎朝タクシーを予約しておいで迎えに来てもらい、日帰りのバスの発着場所



からでる小旅行を二人で楽しんだ(※1)。千鶴子が計画を立て

時間を上手に活かした。千鶴子から色々な話を聞き、バスの中で質問することもあった。

美術館や博物館のすばらしさ、写真で見るのみだったバッキンガム宮殿、そしてテムズ河の船下り。ロンドンの反対側、大西洋まで足を伸ばした。英国の施設も見学できた(※2)。



バスの中はピンク系や白髪の人も多く、またブルーの毛髪の夫人が美しい帽子をかぶっていたのが印象的だった。私達はたった二人の日本人としてみんなに見られた。再三バスから降りて休憩しては紅茶を頂いた。

また、夜に「オペラ魔笛」を見に連れていってもらった(※3)。「お母さん、着物を着て」と言うので、持参した付け下げにおたいこを結んで出かけた。座席から見渡すかぎり日本人は私達だけ。休憩時間にティールームへ行く。ロングドレスの貴婦人達を珍しく見る私だったけど、自分もまた珍しいとあちらの方々に外国人として見られていることが肌で解り、おかしかった。

ホテルに集合する時間までに私は予約の部屋に戻り、千鶴子と別れ、翌朝団体の



皆と一緒に帰国した。個人で行くより、ツアーの方がずっと安く行けた旅だった。

.....渡英して三年たった時、一度千鶴子は帰国しているから、私がイギリスへ行ったのは渡英してから4年はたった頃だった。娘と二人で日帰りの小旅行をしたことは前に記したが、その時も私はアレン御夫妻(※4)の車で、日本に來られ面識のあった方の池と鯉を見せてもらうに出かけたのだった。芝生のきれいな庭

にリンゴがたわわに枝をたれ、七面鳥の丸焼き



などのオードブルで、コンクリートの四角い池だったが、灯籠を置いたりしてちょっと日本の庭園を模していた。集まった大勢の英国の方々とその時頂いた立食パーティのチェリー酒のおいしかったこと、未だに忘れられない。肌の色が違っても、人を思い合う心は同じなんだとつくづく考えさせられた一幕もあって、実に楽しかった英国の旅であった。

イギリスへ行った先々で写真を撮り、ハミリに映し、アレンさん御夫妻と車中語り合ったこと等も録音テープにとってきた。時の過ぎるのがもったいなく、有効に過ごしたあの日、あの時、千鶴子との旅は何物にもかえがたい私の宝となって心の中に焼き付いている。娘に会いたい一心で行ってきたロンドン、あの時行って来てよかったと思う。

- ・ バッキンガム宮殿までの花のある広き公園
娘とはずみゆく (ハイドパーク公園)
- ・ 赤き服に黒長帽子ウインザー城の衛兵の
交代に人だかりする
- ・ 白人の列に並びてあつあつのポテト買いたり
ブライトン波止場

〔補足説明〕

※1. 「はとバス」のような、地元の人たちが遠出の小旅行に利用する日帰りバスツアー。行った先は、巨石群の遺跡で有名なストーンヘンジやらシーサイド・リゾートとして有名なブライトン、そしてウィンザー城などの人気観光スポットだった。

※2. 肢体不自由児の施設訪問は母のたっでの希望で、私が予め先方から見学許可を取り付けてあった。『ブレイグランド』と呼ばれる、通所リハビリ治療施設で、自由遊戯による動作訓練が主だった。

※3. ロンドンのコヴェント・ガーデンにある歌劇場「ロイヤル・オペラ・ハウス」でモーツァルト『魔笛』を観賞。実に華麗な演出であった。

※4. 錦鯉が取り持つご縁で【英国錦鯉協会BKKS】のアレン会長夫妻と親交を結ぶ。1975年に【英国錦鯉協会】の有志ら一行がジャパン・ツアーで舞鶴を訪問し、【愛鱗会】会員らとの親睦を図ったという経緯がある。その折の良き思い出の返礼としてわざわざアレンご夫妻始め、会員の皆さま方が母のために歓迎パーティを催してくださった。Mr.&Mrs.ホリソンとおっしゃる個人宅で庭の池の錦鯉を見ながらの嬉しい懇談であった。Mr. シールからは母のロンドン到着当日に薔薇と蘭の香り高い花束が届けられるなど、心尽くしの歓迎ぶりであった。



1978年12月14日

お父さま&お母さまへ

私は元気です。資格論文の制作に追われています。毎日タイプを叩いています。もうすぐ仕上げに入るところです。クリスマスの休暇

が待ち遠しいです。新年がもうすぐやって来ます。お母さまが順調に回復している由。本当に安心しています。充分休養を取ってください。時にはお父さまの手料理、味付けしたおでんやらを楽しんだり、それっていいわね。これ迄他人に尽くすばかりのお母さまだったから、多少は尽くしてもらおうのもいいことです。

ところで、日曜日にはこちらの英国錦鯉協会一行のツアーで秋に日本に行ってらした、Dr.クックさんご夫妻のお宅にお食事のお招きをいただいております。夏こちらでのパーティの折りお母さまとも一緒した方です。かなりの‘鯉キチ’ですよ。どうやらご自分の池の錦鯉を私に自慢したいみたいなのね！さて、お父さまは鯉たちの世話に明け暮れておいでのようだから、あまり淋しくてないわね。どうぞお体に気をつけて…。取り敢えずご連絡まで。

千鶴子より



1978年12月18日

お父さま&お母さまへ

資格論文、書き終えてやれやれです。さて、ドクター・クック宅に招かれて、日曜日にお訪ねしてきました。もう仰天しました。この英国の地では滅多にお目に掛かれないような選りすぐりの錦鯉だったの。ついこの前の京都で開催の【愛鱗会】全国品評会で入賞したのやらもあるし。それに舞鶴での親睦会以来昵懇の間柄になっておいでの京都の Dr.百々先生、そして他にもいろいろの方からプレゼントしてもらったのもあり、どれもこれも見惚れるばかりの錦鯉で、そんなのがウジャウジャ池いっぱい群れ泳いでいるのだから実に壮観でした。池には水温を温めるポンプが設置されてあって、そのせいか鯉たちはそりゃ元気でしたよ。どれもこれも遠路遥々

日本からやってきたのかと思えば、私としても感無量でした。英国での錦鯉観賞のノウハウが格段にレベルアップしてきている。おそらく錦鯉の死亡率やら罹病率も低くなっているんでしょ。随分と此地での錦鯉愛好家たちは自信を付けておいでです。おそらくは【愛鱗会】との親睦が功を奏しているということでしょうね。ドクター・クックはもうとてもご満悦で、なんでも聞くとこに拠ればお礼に Dr.百々先生を始め、11人ほど来年の6月にご招待するんですって。私は彼から通訳をお願いされました。奥様の Mrs.クックはとてもお綺麗な方で、ご主人の‘鯉キチ’ぶりに適当に笑顔で付き合っておいででした。夫唱婦随って感じで・・。

ホテルでちょっと豪華版のディナーを頂戴した後、Dr.クックの運転する乗用車(結構高級車！)でオックスフォード・ストリート(銀座のようなところ)へと繰り出したわけ。この季節の呼び物というか、クリスマス・イルミネーションといって、この辺り一帯はどこもかしこも競うように電飾が施され、人工的ながら夢幻的世界のよう・・。「ハロヅ」のはさすがに華麗で、眼を瞠ったの。進行方向はリージェント・ストリートに入り、ピカデリー・サーカスへと向かっているんだけど。見物にやってくる人々で大変な賑わい。勿論車道も渋滞だから、車は全然遅々として進まず。それでも車内の灯りは消して、窓の外のピカピカのクリスマス・イルミネーションの飾り付けを存分に堪能したってわけなの。ご一緒したのが末っ子の10歳のお嬢さん(4人姉妹ですって！)で、いっぞやお母さまのあげた、例のキティちゃんの図柄のあるサンリオのペンシルケース(鉛筆入れ)を持っていました。大のお気に入りなんですって。すごく喜んでいましたよ。Mr.&Mrs.クック夫妻は前の座席で、私とその末っ子のお嬢さんはゆったりと後部座席にくつろいでいたわけだけど。それがね、

傑作なの！ふと私が窓の外のイルミネーションから傍らの彼女に眼を向けたら、可笑しかったのよ、彼女、薄暗いシートに体を丸めて指しゃぶりに浸って夢心地なのよ。ほら、お母さまが渡英してきた折、子供らが行き先々どの子どもの子も指しゃぶりをしているのが奇妙に映って仕方ないって驚いてたけど。そうねえ、幼い頃から一人で寝かしつけられているせいかしら、誰に添い寝してもらえるわけでもなし、自分の指しか相手してくれるものがないということだわね。クックさんとこは結構裕福だし、ご夫婦揃って教育程度も高いでしょうけど、こういう状況では、まったく年齢に関係なしに、幼い頃に一人で寝かしつけられた習慣どおり、つまり‘子ども返り’しちゃってたわけ。夫婦の間に割り込んで、うるさくするわけでもなし、実にいい子してるわけだけど。それに一応私と一緒にいるんだけど、一人おとなしくしていることに日頃慣らされているみたいで。確かに Mr.&Mrs.クックの語らいはあるとしても、後部座席のお嬢さんにまでは言葉掛けはないし。つまり日本的な意味での親子のワイワイガヤガヤの家族団欒という雰囲気とは違う。‘夫婦’というものから子どもは除外されている。それが当たり前という感覚。決して意地悪な意味ではなく・・。妙だけど、イギリスの子どもの‘孤独’というか、悲哀感をちょっぴり彼女を通して一瞬感じたような次第でした。

さて、そろそろ今年も残り少なくなりました。そちら日本の師走はどんな風景かしら。懐かしいというよりも、ちょっと思い出そうとしてなかなか思い出せないのよ。お父さまとお母さまがお元気ならば私は何もいうことはありません。どうぞお風邪など召しませぬように。

では又ね。 千鶴子より

.....



1978年12月21日

お父さま&お母さまへ

クリスマスといってもやはり不況のせいか、あまりパツとしません。それでもこの季節恒例ですから、人々は誰も彼もクリスマス・カードをひとまず用意したり、プレゼントの買い物にも結構忙しいのです。気持ちだけでもお祝いムードにしたいわけ。やっぱりクリスマス・プレゼントってお互いにあげたり貰ったりするのは嬉しいものですね。私も既に幾つかいただいております。クリスマス当日迄開けずに置いてあります。ペピのお母さんにクリスマス・イヴの晩餐に招かれています。この前わざわざお母さまが持ってきてくれた浴衣の生地をプレゼントしようと思ってます。それからお正月に招かれるドクター・カーベルには扇にしようかなと思ってます。

ところで、気候が寒くなったせいか、鼠が台所に食べ物を漁りに来て、なんとうどんやらラーメンやら、それにきな粉やら、日本食品ばかり食い干切って、おかしい鼠です。そろそろお正月が来ますし、その準備のつもりで、私も日本の食糧品の買い出しに行こうかと思ってるんです。新しい年が来ます。嬉しいです！

千鶴子より



1978年12月23日

お父さま&お母さまへ

昨日冷えると思ったら、雪が降り始めました。今日はみぞれの寒い日です。最近ごくあつかめの下着を買い求めました。部屋はガス・ストーヴですから、寒い思いは全然してません。それから、今日は『ミカドヤ』へ行って日本の食糧品を買いだめしてきました。お餅は太るのでやめて、

ラーメンやら稲荷すしの皮やら、納豆やら・・・いろいろ。あのね、発見よ！「さっぽろ一番のえぞ味ラーメン」っていうのがあったの。札幌のラーメン横丁の『みつる』のラーメンの味と同じだよ！美味しいの！知ってたかしら？

ところで、トモエさんとこのご主人のお母さまが3週間の予定でお見えです。大晦日の夜は遊びに行こうかと思ってます。ドクター・クックご夫妻が、日本のおみかんがすごく甘くて美味しかったって感激しておられましたけど。こっちのは小粒で甘くないのです。林檎も、日本のような大きくて美味しいのはこちらには無いのです。ここでの暮らしの愚痴をいえばいろいろあるけど、それでも、まずまず結構満足して生きています。お蔭さまで！では又。 千鶴子より



1979年1月3日

お父さま&お母さまへ

おめましておめでとう！いよいよ1979年を迎えました。帰国を待ちわびてます！

こちらはここしばらく雪は降りませんけど、なかなか積もった雪が消えず、路上は凍結していて、歩くのが危険なぐらいです。昨日、商店街の坂になっているところで、なんと橇で遊んでいる子どもたちを見ました（絵のような風景！）。北海道での暮らしを思い出しますね。懐かしいです。それでふと沢庵漬けの大きいのをガリガリ齧りたいなって思ったのよ。あの当時、お母さまが樽にいっぱい漬け込んだ沢庵やら白菜やらを食べたじゃない！時折訪ねてくるお父さまの部下の若い兵隊さんたちもボリボリ嬉しそうに食べてたわよね。薪で真っ赤に焼けた達磨ストーブを囲んで。あの極寒の地で、旭川だの札幌だのと

転々として、よくぞ生きてたもんだ。でも、家族一緒だからほんと結構幸せだったのだなあとしみじみと回顧の想いを深めたことです。

トモエさんとこのご主人のお母さまがいらしてるの。昨夜お宅をお訪ねして、話しこんできました。岩手の水沢の方なんですって。私が秋田生まれなもんで、それは良いことだったと喜ばれて、同じ東北出身の誼でいろんな話を聞かせて下さいましたよ。夫婦の苦労話とか(お母さまとほぼ同年齢)。面白かったのよ。昔は一突きしても3日も経ないと鐘の音が聞えなかった(ご主人のこと!)けど、今頃は(病気の後だって)一日で還ってくるってさ。つまりはご主人が変化した話とか。それはどこのお宅も同じだわねえ。やはり東北の女って堪え忍ぶんだわね。それから、自分の息子と嫁のこととかも…。世代間のズレをも皆で話し合いました。不況の話も出ました。モノが溢れているという贅沢な話やらも。日本のカタチンバな情勢はこれからの行く末を思うと何かと不安を覚えました。でもそこがいずれ自分の落ち着く先だと思えば、何やら観念する思いもあり、とても勉強になりましたよ。日本語のお喋りがもう嬉しくて、何よりでした!

ところで頼みしたいことがあります。**【芸術新潮】**という月刊雑誌を今月号から買っておいくださいませんか? 是非にも帰国後に要するのです。「精神分析」の導入にあたり、どういう言語を使えばいいものやら目下思案中で、ここから幾らかヒントを貰えるんじゃないかとちょっと悶いたものだから。勉強したいの。お手数掛けちゃいますが、是非とも宜しくお願いします。

ところで例によってチョコレートなど菓子類を荷造りして送ったのが、そろそろそちらに

届く頃かしらね。さて、しばらくクリスマス休暇でのんびり致しましたが、そろそろ仕事始めです。

ではご機嫌よう。 千鶴子より



1979年1月15日

お父さま&お母さまへ

明るい日差しが照るようになりましたが。雪はまだあちこち残っているという具合です。お母さま、イギリスで去年の夏、Dr.百々先生と一緒に私たちが招かれていったパーティの席でお腹の大きかった奥さん、覚えているかしら? マルコム奥さんでリズというんだけど。クリスマス・イヴの日、3番目の男の子が産まれたんですって。名前はピーターですって。可愛いカードが届きました。リズとマルコムご夫婦の子どもたちって、どの子もほんとに素直によく育っているわよ。長男がアンドリュー、次男がアリスターというの。すっごく可愛い。近々遊びにゆこうと思っています。

つい先日の電話でもアレン夫人が、**BKKS**(英国錦鯉協会)と日本の**【愛鱗会】**の友好は舞鶴の山上夫妻とチズコとが結んだってことを力説していましたけど。それもまるで夢のような、今になれば信じられないわねって感じ…。**【タヴィ】**留学だけではなく、そこになんともとんでもない嬉しい‘おまけ’が付いたものだわねえ。それもこれも神様の思し召しかな?! でも、**【タヴィストック】**だけでは決して知り合うことの出来ない、普通一般のイギリスの方々に親しくさせてただいて、どれほど心強かったことか。お父さまだって、本音のところでは千鶴子がやってることはさっぱり解らんとお思いでしょうけど、そこに錦鯉が絡めば、イギリスも日本もないわけで、一緒に喜べるのが見つかったことを私としてはやはりラッキーだと思うのです。正直いえば、誰に感謝しているのか、よく分からないんだけど…。

それから、小此木啓吾先生を通して、出版社から或る本の翻訳の依頼が来ました。原稿用紙を送るっておっしゃってるの。届き次第、ぼつぼつ書き始めるつもりでいます。でも今の現実としては、私の日本語の文章力は使い物にならない気がするのよ。妙な感覚です。こちらでずっと‘半人前’のつもりで暮らしてきた私が、いざ日本に戻れば‘一人前’になれるかといえば、とんでもないわけ。おそらく当分の間は‘半人前’でしかないのしょうから…。ここに到り、帰国がもう直ということで、俄然気持ち焦り始めました。頑張らなくちゃってことですね。

では又。 千鶴子より



1979年1月18日

お父さま&お母さまへ

そちらは寒いですか？こちらの天候はどんより灰色がかった寒空が続いています。それもなんと言うことか、又今日もみぞれが降りました。

ところで、先週の日曜日、ドクター・カーベル宅に招かれて行ってきました。ヴィクトリア駅から列車で30分のところ。郊外だけあって空気も澄んでいて、とても落ち着いた町です。ドクター・カーベルにご案内いただいて、駅からちょっと遠回りして、歴史的にも名高いんだそうですが、16世紀の或る建造物を見物してきました。その昔は農家で、その後金持ちの子弟の寄宿学校になったとかで、築400年以上も経ているのに、なんとかよく保存してありました。慎ましくも堅実といった昔の人たちの暮らしぶりも伝わってきました。英国人にはそうした自分たちの歴史を重んじる気風があるわね。記念に絵葉書を幾枚か買い求めましたから同封しますね。雪がうっすらとあちこちに残ってました。陽射しは少しだけありましたけどね。

ドクター・カーベルの手料理、今回は羊のロースト肉とジャガイモやらの野菜、それに私の大好きなトライフルのデザート、とてもご馳走でしたよ。ホテルでいただくみたいな、殊更に贅沢というわけではないけど、満ち足りた気分を味わえる。イギリスの家庭料理も結構いいものです。ベランダに餌付け用のピーナツの袋がぶら下げてあって、そこにひっきりなしに寄ってきて啄ばむ野鳥たちを眺めながら、平和な気分でした。だけど、それとまったく同じ光景を一昨年ドクター・カーベルのお父さまと一緒に眺めていたことが思い出されました。もう他界されておいでなの。窓際のソファに座ってくつろいでおいでだった、その人がもうそこには居ないわけだから、なにやらそこにぽっかり穴が開いてるみたいで…。スコットランドから移住されてほんのわずか数年でお亡くなりになったということになる。老齢となれば、やはり樹木にも似て、他国には根付かないものかな。我が娘がどんなに心配りしたとて、郷里のスコットランドではないということが彼の心を淋しくさせずにはいられなかったのかしらってふと思ったり…。でも、ドクター・カーベルにしてみれば、充分なことをお父さまのためになさったと一応満足しておいででしょうから、それはそれで良かったと思うべきでしょうね。さて、例の日本の扇、とても喜ばれましたよ。では又。 千鶴子より



1979年2月9日

お父さま&お母さまへ

気候はだいぶ明るさを増して、春の近づきを感じられます。落の臺とか、セリとか、この季節は一番舞鶴に帰りたくくなります。懐かしさが込みあげるの。先日のたよりで書いた、北海道で沢庵を齧ったこと覚えてないの？私のこけたこととか、そんな心配なことばかり覚えているの？

確かに私はよく転んで膝こぞうをよく擦り剥けさせたりしてたわね。それで赤チン塗ってもらったり・・。やっぱり母親だからね。お父さまはどう言うかしらね。

さて、お母さまの退職後のこれから、気候に日々清々とした気分で暮らして欲しいものです。いい思い出をうんと作ってゆかなきゃね。これからです！お母さまの小豆島への巡礼の話の伺い、とっても感激しました。さすがあーって感じ！時折、私も思い切って非日常的なことをやることもあるけど、こりやお母さまの方の血筋だね、きっと。手堅く直実にものごとをこなしてゆくのはお父さまの血筋なのでしょう。私のほう、仕事は順調です。この前、【タヴィストック】のセミナーでセラピイの症例発表しました。私、又々‘株’を上げましたよ。やっと来るところへ来たという満足な思いです。資格の件は、なんら問題ありません。でも、とにかくこちらの事務処理が万事のろくてのろくて、歯がゆいこと頻ります。あちこちでストライキがまさに大流行です。ゴミ集めの人たち、病院の掃除人・料理人・学校の先生・こづかいさんその他、大勢！報酬をアップしてもらいたい気持ちは分かるけど、既に見るからに勤労意欲を失っているといった体たらくなのが問題。早くこの国から逃げ出したい思いです。

千鶴子より



1979年2月16日

お父さま&お母さまへ

こちらは物凄い吹雪です。道路はカチカチにしばれているのですよ。北海道のあの寒さを思い出しては何やら泣けてきそうな気分です。近隣の日本人家庭の子どもたちも風邪でやられちゃって、可哀想なことでした。私もその風邪うつされて、もう汗びっしょりで、下着を替えるの

が頻繁だから難儀でしたよ。もうすっかり良くなりましたけど・・。お母さまの小豆島の旅はどうしたかしらって思っているのです。福井の海岸には水仙の咲き乱れるところがあるんですってね。2月だというのに小豆島は温かかったでしょうか？こちらはあちこちストライキ大流行で、なんとも社会不安も著しいことです。ところで、先日は仰山お金送ってくださって、どうも有難う。もう当分送金は無用です。お蔭さまで心強く生きていられます。ほんとに済みません。ヒヤシンスの鉢植えが花屋の店先に売りだされていました。でも蕾はまだ固いようです。春よ、来い！早く来い！って歌ってます。では又ね。

千鶴子より



1979年3月3日

お父さま&お母さまへ

気が向いて、ラジオを付けてみたら、日本の尺八やら琴やら鼓やらがジャガジャガと耳に入ってきましたので、ここは日本かと一瞬錯覚したようなことです。だいぶ気候が穏やかになって、近頃では青空が生き返ったような風景です。裏庭のボケの花が咲きましたので、ちょっと枝を切ってきて部屋に飾りました。春の訪れです！

先日、『横浜国立大学』の心理学の助教授で**繁多進**先生という方が【タヴィストック】に一年研修留学で見えてらして、私を訪ねて来られました。しばらくお互いに頼りにしてゆくことでしょう。私は日々大変に多忙ですが、日本語能力回復に、日本のものをも熱心に漁っています。日本の新聞を無料でくれるというので、近くの日本の図書類を売ってる本屋さんからいただいて、それらを読みましたが。まあ大変な世相ですね。自殺の多いこと！こちらの経済は落ち目ですが、まだ冷静さはあるようです。

ところで、【タヴィ】の先輩で英国貴族のエリザベス・カートライトが結婚したの。その結婚披露のカクテルパーティに招かれて行ってきました。主催なされたのが彼女の母親で、Dameの称号の付いた方からのご案内状がなんとわざわざ【タヴィ】の私の郵便ポストに入ってたのよ。私と同期のセーラが傍らにいたので、読んでもらったの。全然手書きの字が読めないんだもの。それで二人で一緒にもうびっくり！

とにかく、実際当日にはそこそこおしゃれして出掛けました。真珠のブローチは勿論付けて・・。エリザベスのお母さまの瀟洒ながらごくこじんまりしたお宅はもう大変な混雑で、パーティは大層華やかなものでした。【タヴィ】の先輩のミリアナとご主人の姿は勿論ちらっと認めたけど、室内は人でごった返してるものだから、声を掛けそびれて、ついにお互いを見失っちゃたりしたという具合で・・。エリザベスは訪問客に囲まれて、次々に祝福を受けて揉みくちゃくちゃになっていたわよ。そこで、私がどんな気分かと尋ねたら、＜コンタクトレンズを片方落としちゃって、もう何が何やら・・＞とか、ぼやいていたのが可笑しかった。一瞬彼女、幸せなのかしらって不安を覚えたけど。随分と晩婚のカップルに見えたの。まさか政略結婚じゃないよねと一瞬疑ってみたい・・。お相手の方は弁護士だそうで、遺産管理やら、あの広大なお邸を護ってゆく上では良き伴侶を得たというのは間違いないだろうと思ったけど・・。まずは良かった良かったということで、パーティーもそこそこ途中適当なところでお暇してきたのです。帰途、これで彼女の人生は定まった。私の人生はなににも定まっていないという、微妙な気分になりましたけどね。やっぱり結婚っていいもんだなって感想を抱きました。では又。 千鶴子より



1979年3月16日

お父さま&お母さまへ

水仙の季節を迎えています。それでも時折みぞれが降ったりで、情けない気分の日もあります。「お雛祭り」もとっくに済んで、そちらはすっかり春なのでしょうね。

ところで、例の資格の件ですが、Mrs. マーサ・ハリスからOKが出ました。餞の言葉というのかしら、＜日本に帰国されたら、チズコはパイオニアにおなりになるのね・・＞と、Mrs.ハリスはにこやかにそう私に語られました。祝盃というでもないけど、まあちょっとその気分で、近くの喫茶店に立ち寄り、レモンティとケーキ2個もいただいて一人祝ったわけ。これで肩の力がちょっと抜けたけれども、これからが大変だという思いなのですから嬉しくてならないって気には到底なれません。でも恩義のある両親に対しては勿論だけど、東京の小此木啓吾先生やら様々な方から期待をいただいていることを考えると、一応これで【タヴィ】を修了したということになるのだから、ひとまずこれで良かったのだと安堵を抱いたのです。ともかくこの歳月、お世話になったこと、お礼申し上げます。

こちらでのセラピイの仕事は今や佳境に入ったというか、とにかく凄く面白い状態です。セラピイの子供たちがそれぞれに終盤を迎えつつ、どんどん変わってゆく。私は満足しています。ここ迄居座っていた甲斐があったと云えましょう。

もうすぐに学期末で、復活祭の休暇を控えております。復活祭も此地で迎えるのはこれが最後になります。総てが終わってゆくというのはなにやら微妙な心境です。

ではいずれ又。 千鶴子より



1979年4月23日

お父さま&お母さまへ

ご無沙汰しました。私は2週間の復活祭の休暇を存分に保養に努めました。裏庭で日光浴したり、本をどっさり読み漁り、至極満足でした。樹木の芽吹きも勢いづいて、いよいよ春もじわじわと初夏へ向けて移りゆこうとしている趣きです。裏庭を散策していると、ついヨモギやらツクシ、それにイタドリを探す眼になるのが可笑しいです。こっちには無いのですよ。桜の木が2、3本あります。ボケの木が1本あります。柳の木が幾本か緑の枝を美しく垂らしています。

ところで、お母さまから届いた封書の中の花のびら、香りがまだあったわよ！お写真が格別に嬉しかった。サッチャンの子どもたちも随分大きくなったこと。お父さま、新しいいいジャンパー着ていたじゃない！お母さまはますますふっくらとしてきて、とても結構です。私の方、此地であと半年、盛りだくさんの仕事をいっぱい抱えていよいよ脂が乗ってきたと言えます。頑張っております。では又。 千鶴子より



1979年5月8日

お父さま&お母さまへ

この頃はとてもいい気候に恵まれ、快適な日々です。今晚は嬉しいことが一つ。家主のミセス・ブルックが例の私の【タヴィ】での資格取得を喜んでくださって、彼女の職場の同僚やら友人やら何人かと連れ立ってコンサート(演奏会)に行くから、私もご一緒にどうぞと誘ってくださったの。久し振りにテムズ河沿いの Royal Festival Hall に出掛けました。出掛ける前、Mrs.ブルックの居間に皆が集い、わいわいがやが

やと持ち寄りの手料理やらワインやらで軽くお食事をしました。私もピザを焼いて持っていきました。コンサートって、この頃滅多に行ってなかったの。以前にはしょっちゅう入り浸ってたのに。ほんとに久し振りでした。ようやく音楽を愉しむ心の余裕を取り戻したみたいで、やはり嬉しかったです。

コンサート・ホールに行く道すがら、まだ開演時間には充分間に合うということで近くの《ウエストミンスター寺院》に立ち寄ったんだけど。私が帰国を間近にしているってわけだから、Mrs.ブルックが、私にロンドン観光させてやろうと気を利かしてくださったんだと思う。さらに、彼女の同僚の若い男性が私をエスコートしてくださって、寺院のあちこちをご案内いただいたの。彼ら英国人の大好きな歴史の講釈もあり、なかなか行き届いたエスコートぶりで、悪くない気分！概して英国男性は、女性に対しての献身という点では躰けが大変いい。それでね、変なんだけど、一瞬ふと、しまった！って思ったの。英国滞在において唯一経験してないといえ、英国男性とのプライベートな付き合いなのよね。結婚しなくても同棲でも良かったけど…。そうであったならイギリスについてどれほど多くのことが学べたかと思うと今更だけど口惜しさが残る。まあ、それもこっちの都合のいい話で。あちらにしてみれば、私のために‘ガイド役’を24時間やるというのも難儀なこと…。そこまでは甘えられないわね。ロンドンとの別離を考え、いざ去る段となれば惜しまれることが多々あるような気分であつちやいます。イギリスに未練などあるはずなかったのに…。変だねえ。

ところで、トモエさんとこの奥さんはおめでたなのですよ。日本の食べ物が無性に食べたいて嘆いておられます。やはり体の変調だか

らでしょうが。日頃我慢していることなのですが、こんな時不意と出るのですね。ミリンボシが欲しいとか言ってましたが。私も俄然里心が付いて、日本のものが恋しくなったもので、『ミカドヤ』に何かないかなって探しに行って、なんと「塩辛」を大決心で買ってきました。お母さんが食べていたのを思い出したというわけ。それから「塩辛」でお茶漬けを喜んで食べてますよ。それからね、ちょっとびっくりなの。ロンドンでお刺身が買える魚屋さんが出来たんですって。「郷に入りては郷に従え」というけど、味覚ってやはりどうしようもない。ロンドン滞在の日本人の需要というか、おそらく「刺身が食べたい！」の大合唱があったんでしょう。異国の暮らしもいいような悪いような・・。

では又ね。 千鶴子より



1979年5月10日

お父さま&お母さまへ

こちらは祭日が続いてあたりなものですから、日頃の仕事の緊張が緩みっぱなしです。気晴らしにロンドン郊外へ出かけてきました。広々としてなだらかに広がる牧草地に生まれたばかりの子羊たちがあっちこちでピョンピョンと跳ねていましたよ。お父さまの池の鯉たちも勢いついてきていることでしょう。懐かしんでおりました。

先日ちょっと大阪から養護施設の見学が目的で渡英されていらっしゃる方があって、私を訪ねてみえるということなので、枯れていた植木鉢の花を新しいのに換えようと思い、花屋さんに行ったら、可愛い小さなピンクのツツジがありましたよ。「ジャパニーズ・ツツジ」だって！蕾がどんどん拵がってきてゆきます。可愛くて鉢ごと日本へ持って帰りたいぐらいです。気候は日増しに明るさを増してってます。どこもかしこも樹

木が葉をぐんぐん広げて緑々です。裏の庭の八重の桜の木も満開。それでも可笑しなことに香りがありませんよ！何でかしらね。さて、日本はそろそろ梅雨なのでしょうか？東京での住まい探しを考えるとうんざりですが。いよいよですね。

では又。 千鶴子より



1979年5月18日

お父さま&お母さまへ

仕事の方は相変わらず順調です。桜も散って、いよいよ若葉の伸びる季節です。こちらも皆さんご機嫌よくしていますか？

先日、例の「横浜国大」の助教授でいらっしゃる繁多進先生と奥さまをもお呼びして、【タヴィストック】の5階のパブ(ちょっとしたお酒が飲めるところ)で三人で愉快にお喋りしたの。その後で中華料理をレストランでご馳走になっちゃいました。日本の現状について随分いろいろ聞くことが出来ましたし、本当にいつでも適当な時に適当な人が訪ねてきてくれることをいつも幸運だと思うのです。それでね、私としては微妙なんだけど。【タヴィ】の仲間と私が気さくにお喋りしてるのを傍で繁多先生が聞いてて、私が互角に彼らと渡り合ってるから、<すごいねえ・・！>って感嘆頻りなの。だけど、それも内心痛し痒しで・・。実は、それって私の思考が英語になっているわけで、日本語で喋るときは、思考回路をいちいち切り換えなくちゃいけないものだから、むしろいざ改まって日本語でまともなことを語ろうとしたら、もたつくというか覚束ないって恐れがあるわけ。厄介なものです。時間が解決するかしら。

さて、そろそろ帰国の切符のことも考えています。『欧日協会』のチャーター機の予約は日本でも出来るはずですよ。そちらで払っていた

だくようをお願いするかも知れません。私の給料だけでは生活費だけでいっぱいです。それで又、大変に申し訳ないのですが、セラピイのケースの Private Supervision(個人指導)をやはりどうしても今のうちにと、特に Dr.メルツァーとか著名な方なんだけど、無理してでもという気があって、そんなこんなで出費が重なり、そろそろ貯金も底を付く頃となりまして、至急 ￡200ポンドの送金をお願いできますでしょうか？いつも本当にすみません。お蔭さまでどうか仕事の方はなんとか一人前になってきています。喜んでおります。もうすぐ会えますね。では又。 千鶴子より

.....



1979年5月21日

お父さま&お母さまへ

そちらは梅雨なのでしょうか？つい先日の週末の土曜日はからっとした、そりゃ暑いぐらいのお天気、日曜はどしゃぶりの寒い日で、今日の日曜日はなんとかさわやかさを保って明るい陽射しです。土曜の午後に裏庭で日光浴と読書をかねて出ていたら、トモエさんとこの奥さんとイクちゃんが訪ねてきてくれました。勿忘草やキンポウゲなど摘んだりして、喜びました。よくよく見るとスカンボも、それにウドもあります。ウドはもう時期遅れで、食べるのはダメでしたけど。家の中からわざわざお茶のポットやら茶碗を運んで、シートを拡げて、明るい緑に包まれ、皆で楽しくお茶をいただきました。たまたまやってきた犬にイクちゃんが怯えてギャンギャン泣いてくおうちに帰る>と言うので、ティパーティーもお開きになっちゃいましたけど・・・。そろそろ帰国のため、荷物の整理をし始めてます。私は、身軽に帰りたいですし、早めに荷物はまとめようと思ってます。

では又。 千鶴子より

.....



1979年6月7日

お父さま&お母さまへ

今日、￡200ポンド届きました。助かります。こちらから送る荷物の件ですが、やはり取り敢えずは舞鶴の家の方へ送るつもりでいます。東京の方にいずれ住まいを探して、落ち着いたらいいいと考えています。就職のことでは、舞鶴にいては連絡も思うようにはかどりませんし。本当に一文無しだから、無からの出発という感慨がします。でも、ちっとも不安に思わないのは、いろんな人が付いていてくれるし、経済的には両親に頼れるということから来るのでしょう。有り難いことです。ますます頑張ってゆかなきゃと意欲燃やしておりますので。どうぞお頼み致します。

近頃は雷がすごいです。どういう気候なのか、おかしいことです。日本は梅雨なのでしょうか？こちら雨はよく降ったりですが、一般に明るい陽射しの日が多いです。アイスクリームが美味しく思う季節です。この頃、トモエさんとこのイクホちゃんがすごなおしゃべりで、キカンボ振りを発揮し始めました。サッチャンのところの二人の子どもたちを想っております。いよいよ‘イギリスの伯母ちゃん’の出番ということになるかしら。愉しみです。では又。 千鶴子より

.....



1979年6月19日

お父さま&お母さまへ

私の買ったサツキの鉢、まだいっぱい咲いています。小粒の花なのです。ピンク色です。可愛くて日本へ持って帰れないのがとても残念なぐらい。部屋中にある観葉植物の鉢は一応貰われ先はもう決まってるの。【タヴィ】の同期のノエルがエルシーと結婚して、家探しに難儀してたけど、どうにかこの近くに見つけたというわけ。

小さいけど庭付きで、だから家具類やら私が今使ってるもので彼らに貰ってもらえるものがあるば差し上げようと思ってる。そんなこんなで身辺が徐々に片付いてゆきます。

お母さまは福知山の方への旅、愉しんできましたか？日本はまだまだ自然に恵まれています。今でも潮干狩りがあるんですってね？私が帰国する頃は、紅葉の季節でしょうし。すごく楽しみにしているのです。

ところで例のそちらから送っていただいたソニー（CF350）のテープレコーダーが故障して（ラジオの方はいいのですが）、修理に出すと一ヶ月は掛かるんですって。そもそもアメリカへの輸出もので、こちらでは電圧を換えてもらったのですが、日本へ持って帰る場合、そちらで電圧を換えてもらうことが可能かどうか、その旨、購入した店屋に問い合わせしてください。お願いします。此地の誰かに差し上げるにしても、故障したままじゃ困るし…。ちょっとそれも思案中なの。

ところで、本出先生がまたまた調査で今月末にお見えなのです。9月迄の滞在ですって。ご馳走して差しあげなきゃって張り切ってるようです。では又。お元気で。 千鶴子より



1979年7月12日

お父さま&お母さまへ

やっと夏の気配です。お父さまは夏に強いけど、お母さまはバテル体質ですから、どうしてるかなと案じてます。よく養生している様子ですが、充分回復して、いつか東京やらへも平気で訪ねてきてくれることを期待しています。

ところでお母さまの短歌、よく出来ているじゃないの！感心しました。とっても気持ちが伝わってくる！幾つもある中で次のが一番よ！

・ ロンドンの娘の声テープに送り来て
われも春陽の窓あけ放つ

ところで、例の京都の【愛鱗会】のDr. 百々先生ご一行の英国の旅は愉しまれたご様子ですか？どうやら‘遊び人たち’の一行だからって、Dr.クックも私には遠慮してか、お呼びは掛からなかったの。やれやれって感じだけだね。こちらの【英国錦鯉協会BKKS】の月報は私の方にも届いてきてます。随分発展している様子ですね。錦鯉を専門に商う地元の業者も増えているようすし、各地で品評会も活発で頻繁になってきている様子が伺われます。私はもはや関係を持たないでおりますけれども。こうした成り行きにはとても喜んでます。勿論いろいろとまだまだ問題はあある由ですけれども…。

本出祐之先生が福祉行政の視察・調査で今、ロンドンに見えてます。時折日本食作って差し上げてます。ご縁があるんですね。折々に本出先生とお喋りするなかで、自然にその都度その都度自分が‘総括されてゆく’ということを実感します。有り難いことです。仕事の方は順調です。頑張ってます。

では又。 千鶴子より



1979年7月18日

お父さま&お母さまへ

日本は暑くなりつつあるような様子、我が家の玄関先の葡萄棚の葡萄たちは大きく熟してきてるかしら。私の帰国は10月18日と本決まり、『欧日協会』のチャーター便です。その頃、葡萄はまだ残っていますか？おそらくは葡萄の収穫時にはお父さまとお母さまが恒例の葡萄酒づくりに精出されるでしょうから、私が帰国する頃には芳醇なワインになっているかも知れない

わね。それもゆしみ！私は帰国したらすぐにもどこか紅葉の名所を訪ねてみたいというのが念願なのですが。さて、どこかいいかしら？

私のほう、こちらの仕事は順調に終わっていきつつあります。ひと夏掛けて、翻訳の仕事をしなきゃなりませんので、緊張が抜けません。日本に帰れば、少しはゆっくりしたいから。まあ今のところ忙しくしておきます。ところで、荷物は全部ひとまず舞鶴へ届けます。整理する必要がありますしね。こちらは暑い日が続きます。冷麦など、久しぶりに食べました。スイカも一切れ、スーパーマーケットで買いました。本当に終りなんだと思うと(こっちの生活のこと)、なにやら不思議な気分です。ではお元気で。 千鶴子より



1979年8月15日

お父さま&お母さまへ

こちらはまた寒くなりました。俄か雨やら強風やら、ヨットで海へ出た人の遭難事故など、ニュースが入ってきます。日本はまさに猛暑で焦げそうな具合なのでしょう。お元気ですか？

先日、リズとマルカムのお宅に呼ばれて訪ねてきました。3番目のピーターはもう7ヶ月になっ

ていました。お母さまに見せようと、子供らの写真をいっぱい撮ってきま



した。同封します。上のお兄ちゃんたち、アンドリュウとアリスターも随分大きくなってたわよ。あその男の子たち、ほんとに上手に育っているのにはいつも感心する。リズが赤ちゃんを私に抱っこさせてくれたのが嬉しかったの。一緒に赤ちゃんの



入浴に付き合ったり・・・。楽しかったのよ。その間も上の子たちはてんでに庭で砂遊びやらに興じてるし、まるで自立してて手が掛からないというか、安心して放っておけるという具合で。なんとも万事が至極穏やかなの。

おみやげにって、プレゼントに立派な壁掛け用の「英国地図」を下さいましたよ。もう感激！



それから昨晚、【愛知県立女子大学】当時親しかったタカコさんがご主人とルックの団体旅行でロンドンにみえて、久しぶりで会ったの。夜の観光、ウエストミンスターの辺りを一緒にぶらつきました。テムズ河沿いのパブに立ち寄り、珍しいこちらの黒いビールを注文して、それから再会を祝して三人で乾杯したというわけ。会えば、何年も会っていないことなど全然気にならないで気楽にお喋りできるって不思議ですね。

日本へ帰る日が近くなって、私はやれやれといった気持ちです。此地で納めた税金が幾らか多少戻ってくるかも知れませんが。まあ一文無しに近い状態で帰国するわけですから、ひどいものです。まあ将来への投資と思っておりま

ので、どうぞ悪しからず・・・。 千鶴子より



1979年8月22日

お父さま&お母さまへ

随分長く音信がないので案じています。日本の暑さは大変なものでしょうから、バテいるのやらとも思ったりしているのです。何週間か前、早朝の3時過ぎ頃、電話のベル音が鳴ったことがあって気掛かりで、家から掛かってきたことがないので、まさか私にとは思わなかったけど・・。遠くに居ると親の安否をやはり気にします。元気でいてくださるように。日本へ帰れば、その点、電話1本で尋ねられることの容易さは実に気楽なことです。マコやらサッチャンには全然たよりしていないのですけど。会えばいろいろ話ができることだからと暢気に構えているわけです。いろいろな方たちから激励をもらっているわけだけど、研究の方はやっと格好が付いてきました。やっと帰れるという覚悟やら安堵やら・・。将来忙しくなるでしょう。ここ迄来れたのも両親のお蔭と感謝しているのです。ほんとと長かったですよ。あともう2ヶ月ばかりです。どうぞくれぐれもお体に気をつけて。

千鶴子より



1979年9月4日

お父さま&お母さまへ

おたより、そちらからの8月23日&26日、そして30日(速達)付けのたより全て届きまして、了解しました。私の7/28付けの手紙がそちらにはなんと8/28に届いたって、まったく人騒がせな話です。23日に€250ポンド送ってくださった由ですが、心配掛けてすみませんでした。実は8月無給の休暇なはずなのですが、給料がちゃんと支給されていたのです(銀行振り込みで)。向こうの手違いだから貰っておくようにって秘書のジェーンに言われたのよ。だから結局のところ、

全然お金の心配する必要なかったわけ。でもお蔭さまで、帰国前、こちらでお世話になった人たちに充分お礼をして帰れます。このちょっとした余裕が有り難いです。ミセス・ブルックにも近々すき焼きパーティに招いて差し上げようと思っているのです。それに、本出祐之先生が英国の社会福祉行政の調査を終えられて帰国される前夜、すき焼きやらグラタンやら調理したのを持参して訪ねていったの。たまたまドイツに留学中だとかいう、先生の昔の学生さんも会いに来てらして、随分と話が弾みました。そんなことも決して余計な出費とも言えない。人と人との付き合いって、時には無理してでも頑張れば頑張るだけのだけのことはきつとあるって最近思うの。

それから、錦鯉の仲間づくりが日英間で急速に広がっている様子あれこれお聞きしましたけれど、驚きますね。Mr.&Mrs.アレンご夫妻はさぞお喜びでしょうね。たかが錦鯉、されど錦鯉というわけで、彼らというパイオニアがいたお蔭で今の隆盛があるわけだから。実はつい先日、娘さんのリンダから電話があって、私の帰国前に一度アレンご夫妻が私に会いたいと言ってるという伝言だったの。週末掛けてどこか遠くの地で錦鯉の品評会が催されていて、今そちらに行ってるんですって。この頃此地でもあちこちで随分盛んに催しものがあるみたい。お母さまがいつか送ってくれた鯉の絵を額縁に入れて差し上げようかと思ってます。やはりご縁のあった方たちですから、心ばかりでもお礼はしておこうと思うのです。

やっと私もこの頃、帰るんだという気持ちでなにやら心騒がしく、いろいろその準備に取り組み始めてます。ご近所の人たちやらお餞別を頂戴した人たちの名前を一所懸命思い出そうとしてます。その傍ら、私は仕事納めで忙殺されてます。ではいずれ又ね。 千鶴子より



1979年9月15日

お父さま&お母さまへ

先日、『欧日協会』から例の切符代として＄348の受領書を送ってきました。これでほんとに帰れるという気分になってきました。9月もあと2週間残るところとなり、私は急激に目まぐるしい有り様です。郵便料金が10月から値上がりになるとのことで、その前に書籍類だけでも日本へ送りだそうと荷造りを慌てて始めました。まあ驚いた！随分あるものです。それに先日余分に＄250送金いただいたのをいいことに、専門図書店に赴き、さらにめばしいものを遠慮なく買い漁りました。本当に感謝しています。将来図書室のようにして他の方たちにも閲覧してもらうことに致しましょう。それに私の担う一つの役割なのだと思いますし。なんだか、大変な将来です、まさに！ では又。 千鶴子より



1979年9月18日

お父さま&お母さまへ

今日、土曜日、愉快的なことがありました。念願の、つまりかねがね一度はそんな経験したいと思ってたんだけど、『のみ市場(フリー・マーケット)』で私の古着とか不要なものの売り出して、なんと＄5の収益がありました！お隣の部屋のフランス人の女の子が場所を確保するのに早朝7時に出かけて、私はお昼前、それに便乗させてもらったというわけなのです。例の和紙の人形さんは20ペニーで売れました。ずうっと日本から私と一緒にだったから名残り惜しかったけど。買ってくださったご婦人は11歳の時からずうっと秋田の人と文通してるんですって。すごく喜んでおられました。そういう偶然って、面白いですね。『のみ市場』ってすごく原始的なの。これ幾ら？

と言われて、幾ら幾らよって、売り手と買い手が互いに交渉するの。私なんてモノを売ったことがないのでドギマギしました。面白い経験でした。庶民の生活は苦しくなる一方ですから、そりゃすごい盛況なの。皆、眼の色変えて漁ってるのよ。また、いいものも結構あるし・・・。

ところで、例のSONYのラジオ・カセダけど、修理に出したのです。Mr. ジョン・ブレンナーのお宅には4人もご立派な息子さんがおいでだし、何かのお役に立つでしょう。ちゃんとしたのをお礼に差し上げてゆきたいと思ったわけ。帰国前、ご自宅に招かれていますし。そんなこんなで、今のところ何ともテンヤワンヤの気分です。

では又。 千鶴子より



1979年9月26日

お父さま&お母さまへ

おたより有難う。飛行機便は10月19日16時40分着(成田空港)です。都心へはかなりあるようでちょっとうんざりです。ロンドンで親交のあったヒロミさんが迎えに来てくれることになってるの。コンラッドと結婚して、今彼は青山の『カナダ大使館』に赴任してるというわけ。そちらでしばらくご厄介になります。舞鶴へ帰る前に小此木先生やら慶応グループの方たちに会って様子を見ておくのもいいかと思いますし。東京の空気に慣れておく必要もありますし。どの辺りに住むのがいいか、少し下検分しておこうかと考えています。いずれ落ち着いたら、舞鶴の家へ連絡しますので。洋酒とかは多分買わないだろうと思います。悪しからず。この頃 わんさと段ボール箱を郵便局へ運んだりして身体が消耗していて重い荷物は自信がありません。ともかく大成功で幕切れです。嬉しいです！ 千鶴子より

.....

.....

■ 附記 ■

劇作家サミュエル・ベケットの綴る文章の中に【多くのことを闇に葬るという罪を犯さずにするために・・】というのがあった。胸を衝かれる思いがした。ロンドンから私の両親宛に書き送った、ごく私的な書簡をこのようなかたちで公開した理由はそれ以外にあらう筈がない。

私の両親**山上昇・つる枝**は、いつか娘の千鶴子が「世のため・人のため」になるものと信じて【タヴィストック・クリニック】への私費留学を支援してくれた。『精神分析』の何たるものかまるで無知であったにも関わらず・・。私も実は長らく「世のため・人のため」をどこか信じていた節がある。つい最近までは・・。あの当時はそうでもなければ、あのロンドンでの暮らしに堪えられなかっただろうと思う。しかしながら、今となればあれは総てひたすら「我がため」であり、一途に「我がこと」であったと思い知らされる。さほどに贅沢で我が儘が許されたということに内心忸怩たる思いがする。

【タヴィ】での訓練を終えるに当たって Mrs. シャーリー・ホックスターとの面談があり、「修了書」のようなものを手渡してもらった。私のセラピストとしての特質について評価の言葉が添えられてあった。当時、彼女は Mrs. マーサ・ハリスを引き継いで、コースの主任教官となったばかりであった。彼女は私に、【タヴィ】のコースを修了したとしても、学位も資格も差し上げられないことをさも申し訳なさそうにおっしゃった。（事実、【British Association of Child Psychotherapists】という名称の、イギリスの流派の違う各トレーニング・コースが幾つか寄り集まっ

た協会に正会員として登録されるということではないわけで・・。）ただ、ここ【タヴィ】で経験したということに意味があるとやら、言い訳めいたことを彼女は付け加えられた。つまりは身分の保証ということだが・・。私としてはどういう感慨もなかった。【タヴィストック】が将来私の後ろ盾になってくれるか否かなど関心の外だった。もはや【タヴィ】に執着していない自分を感じた。一応終えた、そして終えた先は自分は一人であるということ、そして自分の立ち位置は自分で見定めるしかないのだと・・。

この時期、【タヴィ】内では誰しもが微妙に Dr. メルツアーのグループの動きに落ち着かない・不穏なものを感じ取っていた。【タヴィストック】は大きく変わろうとしていた。職業訓練としての趣きがより濃厚になりつつあった。窓口を拡げすぎの感があり、何やら雑駁な印象を覚え始めた。所詮はポスト争いに終止するみたいなの、どこかぎすぎすした、世知辛い雰囲気を感じ出した。人間の育成が何よりも問われているといった悠長な雰囲気はもはや影を潜めつつあった。【タヴィ】で私にとって一番ご縁があり恩義のある人というのは Mrs. マーサ・ハリスであるが、彼女は夫君である Dr. D. メルツアー共々オックスフォードへと移転された。私のトレーニング・アナリストであった Miss. D. ウエデルも追随した。彼らは【タヴィストック】とは袂を分かち、これからはオックスフォードを彼らの活動の拠点とするらしかった。海外講演やら出版もあれこれ企画されておいででしたらうし、それに、メルツアーの「農場主」になりたいという若かりし頃の夢をオックスフォードという地では叶えられたということでもあるらしかった。そして、明白な事実は、その彼らの計画の中に私という存在は加わってはいないということだ。もはや「我が道をゆくしかない」ということ・・。

Mr.ジョン・ブレンナーは私に餞の言葉として<If you are really efficient, people will appreciate you.>とおっしゃった。意識すれば、「貴女には実力があるんだから、人々は貴女を認めざるを得ないはずだ」というものだ。だが、それは違うと思った。日本には歴史的にみても、外来のものが受容されるのには独特の困難が付き纏う。日本人にとって『クライン派精神分析』というものが果たしてどのように受容されるものか、確たる展望はない。問題は自分だということ。人に認められるか否かではもはや無い。

帰国間際に或る‘衝撃’を体験した。その時、私は【タヴィストック】で仲間らと語らっていた。ふと誰かが、自分たちがいかに普通の人たちから隔たっているか、いかに自分たちが彼らにとって分かれ得ないものであるかということを嘆いた。その場の誰しも心当たりがあるから、一瞬シンとなった。私はその途端、慄然とした。<私はわたしに一体何をしたのか・・・>と己に問うた。私たち【タヴィ】の人間は長い困難な訓練を経て、「心の見え方」を修得したはずなのだ。だが、それはやはり途方も無い、奇怪なもので、それが「世のため、人のため」と豪語する自信なぞ無い。チェロを奏する、誠実で利発な Miss.Kate Paulですら、<最初、メラニー・クラインをクレージー（狂ってる）って思ったのよ>と、私に打ち明けた。この躓きは何なんだろう。でもすごく分かる。だから、普通の感覚からして到底分かれられないとしても、嘆くも憤るもない。事実自分たち一人ひとりがかつて幾度となく躓きを味わったのだから・・・。では何故に踏みとどまったのかということ。それこそが謎だ。さらに云えば、その躓きから今後無縁であろうはずもない。一人ひとりの人生のなかで、躓くその都度その都度、答えを掴みとり、そして踏みとどまるであろう。そのためにこ

そ《タヴィストック・ファミリー》がある。しかし我が身を振り返れば、私はこの【タヴィ】の仲間から今や一人抜け出てゆこうとしているわけで・・・。<私はわたしに一体何をしたのか>という問い掛けは、執拗に私の胸に重く鳴り響いた。

ただ一つ明白なのは、心理臨床の場で感得した「心の見え方」、それが命綱であり、手放すわけにはゆかないのだ。事実「それはこう見える」を「そうは見えない」ことへと差し戻しはもはや不可能だということ。しかしながら、帰国後の私がクライン派の一人として、この「心の見え方」に固執し、尚も徹底せんとすれば、間違いなく日本で‘孤立する’ということだけは間違いないと直感された。当初からのそうした煩悶やら葛藤を自分の親に告げることは毛頭出来ることではなかった。ロンドンからのたよりの中でも、そして事実、帰国後の彼らとの語らいの中でも・・・。

果たして誰かと共有し得るものか否か、心もとない。だが、日本に『精神分析』を根づかせてゆこうとするならば、私が孤立無援であることはむしろ警戒せねばならないと思った。帰国後、「無理をしない・無理をさせない」を鉄則に、おっかなびつくりの個人開業であった。で、その結果はというと、やはり‘不徹底’の謗りを免れないと感じてきた。それも致し方なしという覚悟はあったものの、かつて【タヴィストック】で培われた「心の見え方」が徐々に曖昧模糊と化すのは忍びない。

そしてようやくここに至って、振り返らねばと強く思った。己の立脚地を模索して遮二無二奮闘していた、あの当時の頃を・・・。そしてロンドンで書き綴った両親宛てのたよりを整理・編集するなかで、自分だけの自分に拘泥し孤立する

ことの無意味さを悟った。私はもはや私一人のものではない。彼の地での因縁に今尚抱えられて、紛れもなく内なる彼ら一人ひとりによって共有された意識として私という存在はまさに実在しているのだということに気づかされた。換言するに、それは即ち、私が「交わりの場(communion)」として在ることだろう。何やらいつの間にか、かつて夢想だにしなかった‘私なるもの’に私は成っている。その摩訶不思議さは、もしかしたらいつか‘あなた’は‘私’であるかも知れない、‘私’は‘あなた’であるかも知れないといった絆への期待を抱かせる。かくして互いが互いに‘開け’の機縁になればいいと念じている。実にそれというのは、19世紀のアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの提唱する‘manly comradeship’（友愛の精神）の謂いなのだが・・・。

勿論、これからの行く末は不確定ではある。だが、ここに一つの矜持が残されている。「精神分析家」というものは、とことん決して自分に油断することを許さないものなのだ。自らを‘油断ならぬもの’として見据えて行く、何処までも何時までも・・・。それだけは誓っていいと自らを慰めている。

(2012/10/15 記)

.....
.....